

## 婦人雑誌『現代乃婦人』の整理と調査

Organizing and researching the women's magazine "Gendai No Fujin" (Contemporary Women's Journal)

高塚 明恵, 青木 俊郎  
Akie Takatsuka, Toshiro Aoki

大妻女子大学博物館

キーワード：大妻コタカ, 柳葉清子, 婦人雑誌, 手芸, 裁縫, 女子教育

Key words : Otsuna Kotaka, Kiyoko Yanagiba, Women's magazine, Sewing, Handicraft, Girls' education

### 1. 研究目的

本研究では、大妻学校の学校機関誌であった『大妻時報』を発展させ、対象読者を一般女性に拡大し、婦人雑誌として創刊された『現代乃婦人』について、資料の現状を記録して整理し、その内容を調査し詳細を明らかにした。

女性読者を対象とした雑誌は明治期から発行されており、『現代乃婦人』が創刊された当時、女性の教養層を读者対象とした啓蒙的な内容の『婦人公論』や『婦人画報』、家庭婦人を対象に家事などの生活の知恵を主として掲載していた『主婦の友』など、すでに多くの婦人雑誌が発行されていた。

そのような中、学校機関誌であった『大妻時報』を前身として創刊された『現代乃婦人』には、編輯綱領として「一、婦道の發揮と社会的地位の向上 一、科学を基調とする生活の改善 一、高尚なる趣味の鼓吹 一、婦人の相談機関 一、低廉で無駄のない雑誌」の5項目が挙げられており、女子教育機関が発行する婦人雑誌として、啓蒙的でありながら、実生活に即した実内容的な内容の雑誌を目指したものと思われる。

明治期から現代に至るまでの女性を读者対象とした雑誌に関する研究は数多くあるが、女子教育機関が発行した婦人雑誌について取り上げたものは見当たらない。このことから、『現代乃婦人』は大妻学院の教育史だけではなく、女子教育や女性史の分野においても重要な資料であると考え、その内容を精査し公開することを思い至った。

### 2. 研究実施内容

#### (1) 資料の現況確認

大妻女子大学博物館に所蔵されている『現代乃婦人』について、各号の現況を確認し、資料の状態

により埃や付着物を除去するドライクリーニングを行った。また各号について点数・頁数・法量・形状・状態（変色、シミ、オレ、ヌレ等）等を記録した。

結果、大妻女子大学資料館には、昭和4年11月1日発行の3巻10号から、昭和6年11月1日発行の5巻11号までが所蔵されていることが分かった。『現代乃婦人』の巻号は、前身となる『大妻時報』の巻号を引き継いでおり、3巻10号は『現代乃婦人』としては創刊号となる。

形状は、5巻10号までは縦188mmから185mm、横123mmから126mmで、B6版相当の四六版であった。また5巻11号からは縦220mm、横184mmとA5サイズ（菊版）へ拡大されていた。状態は、綴じに使われている金具が錆び、綴じ孔の周囲の紙が汚損しているほかは、経年のヤケやオレが見られる程度で、破れや頁抜けなどの大きな破損はなく、おおむね良好であった。

#### (2) 画像データの作成

『現代乃婦人』各号について全頁をデジタル化した。TIFFファイル、PDFファイル、JPEGファイルを作成した。

事前調査で、該当資料は平綴じの形式で、ホッチキス状の針金を留め具として用いていると推測され、博物館の機材では、資料を見開き状に開いて撮影、もしくはスキャニングする際に、ノドの部分に過剰な負担がかかり破損する恐れがあることが分かった。

資料に負担をかけず、かつノドの部分に影やたわみが出ない画像データを作成するために、専門の業者に依頼することにした。

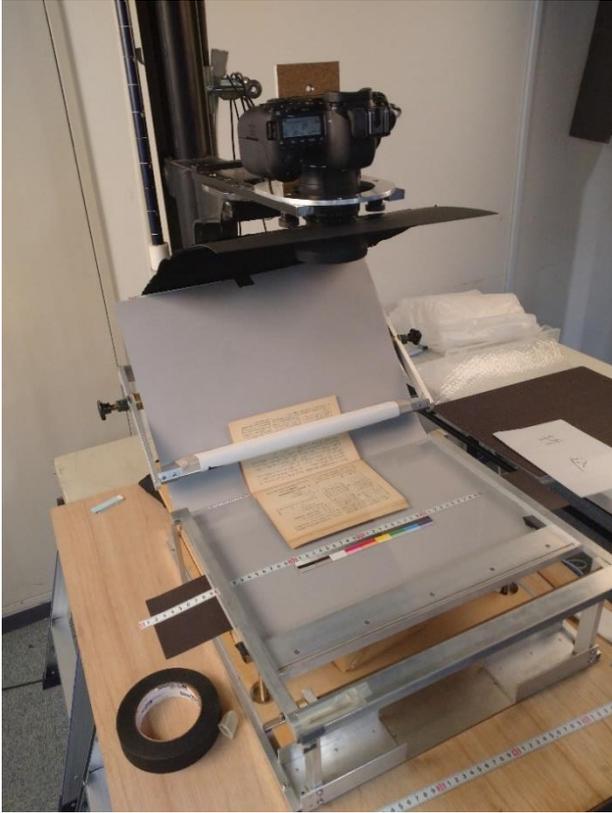


図1 撮影台

資料のノド部分を傷めないよう必要最低限の角度に開き、撮影面をガラスで、もう片方をクッション性のあるバーで抑えカメラを垂直位置に固定して撮影する。

業者の選定にあたっては、十分な技術と実績を持ち、耐火、耐震、調湿、空調等の設備が整っており、資料の保管環境に対して24時間監視等十分なセキュリティ対策がなされているか検討の上決定した。

画像データの撮影は、株式会社インフォマージュのスタジオで研究代表者立ち合いのもの行われた。綴じがきつく見開き180度には開けないため、専用の撮影台(図1)を使い、片頁ずつ撮影した。

### (3) 内容整理及び調査

作成した画像データを用いて『現代乃婦人』各号の「資料名」「ヨミ」「巻号」「印刷年月日」「発行年月日」「西暦」「編集発行兼印刷人」「発行所」「印刷所」「価格」「頁数」を記録した。

「発行所」は「現代乃婦人社」で、住所は「東京市麹町区上六番町七」となっており、大妻学院の所在地と同じことから、『現代乃婦人』発行にあたって学院内に出版社と編集部が設けられていたことが判明した。

発行日は毎月1日、月1冊、年間で12冊を刊行するスケジュールであった。価格は、3巻10号から5巻10号までは、1冊10銭、12冊1円20銭で、菊版となり頁が倍増された5巻11号からは1冊15銭、12冊1円80銭へ値上げされていた。また、「編集発行兼印刷人」は4巻9号までは、『大妻時報』と同様に当時大妻学院の職員であった衣笠恵陵、それ以降は柳葉清子の名義となっていた。しかし編集後記は3巻10号から柳葉清子が執筆しており、編集作業は創刊号である3巻10号から柳葉清子が中心となって行っていたことが分かった。

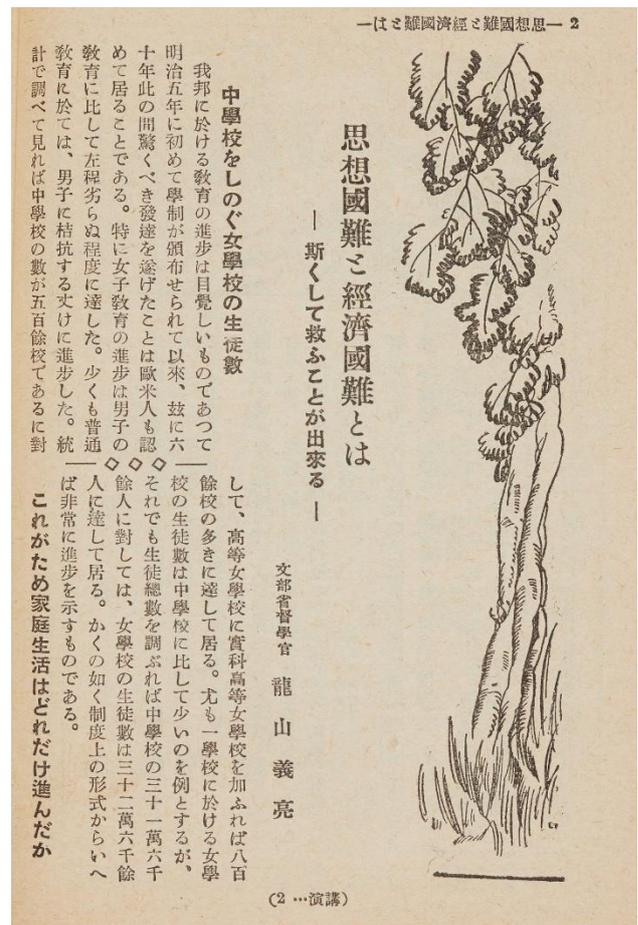


図2. 『現代乃婦人』3巻10号(創刊号)  
頁右肩に通しの頁番号が、下部中央に分野別の頁番号が記されている。

『現代乃婦人』では掲載内容を「講演」「家庭」「裁縫と手芸」「趣味と文芸」の4種に分けており、通しの頁番号の他、分野別の頁番号も振られている。分野別の頁番号は各号をまたがって振られており、あとで数冊分の冊子を分割してジャンルごとに綴じ、必要な分野の記事のみ保存して置けるように工夫されていた(図2)。ただしこの工夫は、5巻10号でサイズが菊版となり、ページ数も46頁から102頁に増加した際に廃止されている。

「講演」には文部省や内務省の官吏、文化団体や学校の長などが、経済や政治、現代女性としての心構えについての記事などを執筆している。

「家庭」では、華道、料理、家計、節約術、美容、健康、園芸、主婦が家庭でできる副業などについての記事が掲載されている。主な執筆者は大妻コタカその他、南雲ハツヨなど大妻で教鞭をとっていた教員たちである。大妻学校で華道の指導をしていた京都古流家元久野連峰も、季節に即した家庭での花の活け方を連載している。

「裁縫と手芸」では、着物や帯の仕立て方などの裁縫に関わる記事の他、編物、摘細工、水引細工、人形細工、刺繍、レース編、染色など多彩な手芸作品の作り方が掲載されている。

「趣味と文芸」には、紀行文や読者による投稿記事で紙面が構成されていた。投稿には近況を知らせるものや、結婚や恋愛、女性が仕事を持つことに対する意見などの他、短歌・俳句・詩・小説などの文芸作品が掲載されていた。

「家庭」と「裁縫と手芸」は主な執筆陣も内容も前身である『大妻時報』の内容が引き継がれたものであり、「講演」と「趣味と文芸」は『現代乃婦人』となってからの新しい要素である。編輯綱領として挙げられている「一、婦道の發揮と社会的地位の向上」「一、高尚なる趣味の鼓吹」の項目が反映された結果であるといえる。

#### (4) web公開のための作業

調査で得られた資料概要及び画像データを大妻女子大学博物館収蔵品データベースで公開するために、PDFファイルをリサイズした。JPGEファイルに関しては、画面上に見開き状態で表示するため、同じサイズで画像をカットする作業を行った(図3)。

また、資料概要及び資料画像をデータベースに登録し公開する準備作業を行った。

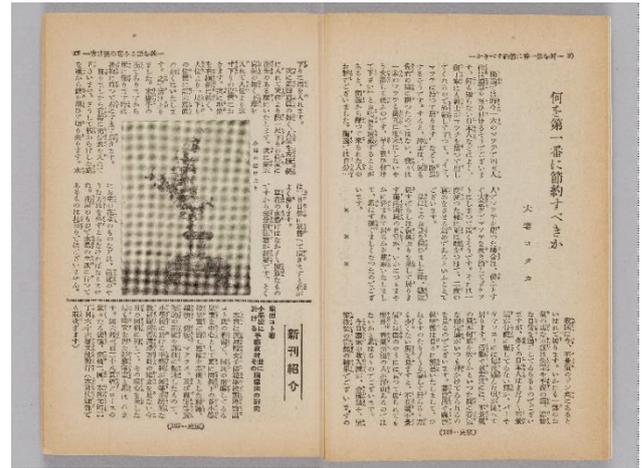


図3.見開き状態に加工した画像

#### (5) 他機関の所蔵資料調査

他機関における『現代乃婦人』所蔵状況を確認し、大妻女子大学博物館に所蔵がない巻号について調査した。その結果、石川武美記念財団近代女性ライブラリーに『現代乃婦人』が所蔵されていることが判明した。大妻女子大学博物館所蔵と重ならない巻号は、5巻7号、12号、6巻1号～6号、8号、10号、11号、7巻3号であった。6巻以降は大妻女子大学博物館所蔵巻号より後に発行されたものであり、昭和7年以降も発行が継続されていたことが明らかになった。

また昭和7年5月の編集後記には、手芸技術を高めるため図案研究の記事を掲載と、分かりやすく手芸の技術を伝えるため、そのまま下絵に使える挿絵を導入したことが記されており、しだいに「裁縫と手芸」欄に割かれる頁が多くなっている。さらに昭和8年3月発行の7巻3号では、内容はほぼ手芸裁縫にかかわる記事で占められており、創刊号から目次に掲げていた5つの編輯綱領の記載もなくなっている。

このことから、『現代乃婦人』は婦人雑誌から裁縫・手芸関係の専門誌になっていったのではないかと推測できる。

### 3. まとめと今後の課題

今回の調査により、学校機関紙『大妻時報』を婦人雑誌へと発展させた『現代乃婦人』が大妻学院校内に設立された現代乃婦人社で編集発行されていたことが明らかになった。

今後の課題について、以下の三点を挙げたい。

### (1) 柳葉清子について

柳葉清子(柳葉キヨ)は、大正2年に日本女子大学を卒業したのち、昭和4年から学院に奉職し、長く大妻コタカの仕事を支え、大妻学院の発展に寄与したことで知られる人物である。また、日本手芸作家連合会(現・日本手工芸作家連合会)では会長を務めるなど手芸教育の分野で活躍した。のち、学院の理事も務めている。

『大妻時報』3巻4号の編集後記には「今回、柳葉清子女史を聘して、その手腕を振るっていただくことにいたしました」とあり、翌号の3巻5号から柳葉清子を中心となって編集を行っている。そして、『現代乃婦人』でも編集で主要な役割を果たしていることが編集後記の執筆内容からわかる。前年度の『大妻時報』の調査と今回の『現代乃婦人』の調査から、柳葉清子が大妻学院に勤務することになったきっかけは、これらの出版物の編集を担当するためであることが推測できる。大妻コタカの秘書的な役割を担ってきた柳葉の大妻学院での最初の仕事は雑誌の編集であった。今後、各号の記事構成や内容をさらに細かく分析することで、柳葉清子の教育観や大妻教育の一端が読み解けるのではないかと考えている。

### (2) 出版状況について

『現代乃婦人』の創刊号は、3巻10号であることはすでに述べた。しかし、いつまで発行されていたのかについては判明しなかった。石川武美記念財団近代女性ライブラリーの所蔵資料から昭和8年3月1日に発行された7巻3号まで確認できた。その7巻3号の編集後記では「本誌は本年新

年号から頁を倍大して毎月有益な手芸付録を附し一冊定価三十銭といたしました」とあるため、それ以降も刊行が続いていたと思われる。今後、さらに他機関の所蔵調査を進めて、昭和8年以降、『現代乃婦人』がどのように発展し、またどの時点で廃刊になったのかその全貌を明らかにしていきたい。

### (3) 手芸裁縫教育とのかかわり

現代乃婦人社では、様手芸の講習会や、手芸作品の展覧会などを主催している。講習会には無料のものや、地方に出張して行うものなど、多くの人が受講できるように様々な形式のものが用意されていた。また、手工芸教育者協議大会を開催し、女子手工芸教育や、手芸教授法について議論している。昭和7年8月に行われた第3回では、高等女学校学科課程中に手芸科を必修科目として追加することを決議している。

今後の研究で、大妻学院内に設けられた出版社である現代乃婦人社が当時の手芸裁縫教育の発展に及ぼした影響について、考察していきたい。

## 4. この助成による発表論文等

### ①web公開

[1] ([https://jmapps.ne.jp/museum\\_otsuma/](https://jmapps.ne.jp/museum_otsuma/))において、調査資料の概要・画像を公開予定。

### 付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2310)「婦人雑誌『現代乃婦人』の整理と調査」を受けたものです。